

北周・孝閔帝期の庾信（下）

— 孝閔帝の弑虐及び三部作の執筆 —

加 藤 國 安

（漢文学研究室）

王誼伝に載せられている。

三 宇文護派による反対派の一掃、及び孝閔帝の弑逆

さて、庾信がこうした異国の中間層官僚として、課せられた土木工事の統率に懸命に打ち込み、また北周の数少ない文人、宇文内史との交遊に希望を見いだし始めていたらしい頃、この朝廷内部には、早くも政權発足時の矛盾が再び表面化してきていた。この間の経緯については、これもやはり先行研究がないように思われるが、史料の全面的復元は史学家の専門的作業に委ねるとして、今は小論に関わる範囲でのみ概述することとする。

本もと身分的に諸侯よりかなり劣っていた宇文護が、孝閔帝を擁して突如台頭してくるや、新丞相として万機を決し始める。それは宇文護にしてみれば熱心な摂政ということになるが、結果的には孝閔帝をいたく軽視することとなった。また、それに対する朝廷高官らの反発もかなりのものがあつた。当時の朝廷内の空気を伝える好資料が、『隋書』巻40

周の閔帝の時、（王誼は、天官府の）左中侍上士となる。時に、大冢宰・宇文護執政し、その勢いは王室を傾けんとするに、帝は拱默（「腕組して口をつぐむ意」）して、閔預するなし。朝士の帝の側に有るは、（孝閔帝に対し）微しみて恭々しくせず。誼は、勃然として進みて、將に之を撃たんとす。其の人ら惶懼して（己を）罪するを請う。（王誼）乃ち止む。是れ自り朝士、敢えて（帝に対し）厳肅とせざるなし。

これは、朝廷の面々が宇文護の方にのみ顔を向け、孝閔帝を軽視したことから、天官府の左中侍上士に御寢の管理官という、さほどの要職ではない王誼に厳しく詰め寄られたという逸話である。それだけ朝廷の全てを宇文護が牛耳っていたということだが、また別の角度からこれを読めば、君臣の礼を守らない輩に一命を賭してでも守らせようとするほどの忠義な官吏が存在したことを、これは示す。北周の官僚は、例の西魏

の「六条詔書」の施行もあつて、職務に忠実で有能な者が少なくなかったのだろう。

また『隋書』卷75辛彦之伝に、「周の（孝）閔帝、受禪するに及び、彦之と少宗伯の盧弁は、専ら儀制を掌る。」というように、新王朝のスタートに伴い、西魏以来の方針たる『周礼』による儀礼制度も継続して行われている。『周礼』の国家観については知られるように、国家を天命を受けた天子により公的に建てられたものと認め、天子の君権も一般の個人の上に高く超越する。この『周礼』の理念に則れば、超越的存在者たる帝王と一丞相との間には、天地ほども隔絶した差がある筈だと、当時の北周朝の面々はそう固く信じて、任務に当たっていたのだろう。

こうした国家観の下に、孝閔帝側近の官には、干犯的な宰相府に対し君臣の礼の順守を、強く求める空氣があつたのだと考えられる。

また宇文護本人に、天子の尊嚴を侵さぬよう、直接しかし婉曲に諫言した者もいた。司倉下大夫の侯植だ。趙貴らの誅滅以後、古くからの宿将の間に、次はいつ自分に災難が及ぶかと不安が広がっていた。朝士らの動搖・離反を心配した侯植は、はじめ宇文護の下で親しく用いられていた従兄の侯龍恩（一大統九 543年に、敵に囲まれた宇文護を、身を挺して救出して以来の忠臣）に、

小さな事でいさかい合い、天下がこんなことで瓦解したらどうするんじや。兄者は丞相殿に用いられているのに、何故お諫め申し上げぬのか？

と護への諫言を勧めるが、聞いてはもらえなかった。そこである時、何かの折に侯植みずから宇文護に直接言上していわく、「公には、益々この国を立派なものにしてもらえれば、天下中こんな幸いなことはござら

ぬ。」（要旨）と精一杯の表現で言うと、護は、

余は、誓つてこの身を国家のために捧げる所存。賢兄にも、しかとこの心をご覧いただきたい。しかし、何かな。卿が今そのようなことを言うとは、よもや余に他志があると言おうとしておるのではあるまいな？

後に侯植は、宇文護に忌まれるようになり、侯植の方も、「禍を免かれざるを懼れ、遂に憂いを以って卒」している（以上、『周書』卷29 侯植伝）。

このように、宇文護の専横は、もはや止めるすべもない所まで深くなっていた。孝閔帝自身、「性、剛果なれば、晋公護の執政を見るや、深く之を忌」（『周書』卷3 同本紀）むようになつていたという。やがて、太祖宇文泰の下で重鎮として久しく活躍し、そのまま孝閔帝の側に仕えた李植（司会中大夫、天官府に属し、六府を統べる副長官。内閣官房副長官格）、孫恆（軍司馬中大夫、夏官府に属し、国防省局長格）らは、宰相・宇文護の独裁者的執政ぶりに、古くからの臣下らのもはや容れられないことを察しつつあつた。この李植は、孝閔帝を世継ぎに決めた会議の際に、抜刀して衆を威圧した例の李遠の子に当たつた。そうした経緯もあつてか、李植の帝への忠誠心は、深甚なものがあつたのだろう。

ここで、李・孫の所属機関に注目してみよう。すると兩人とも、それぞれ丞相・宇文護と国防相・賀蘭祥のいる二部署に属することが分かる。ということは、思うにこの兩人は、宇文護と賀蘭祥の専横を防ごうとして、忠義心から幾度か二人に自重を試みてみたのだからうがうまく行かず、次第にきしみが大きくなつていったものと想像される。そして、ある時点で孝閔帝の将来に、のっぴきならぬ危険を予感するようになって

たのだろう。

かくしてその至忠の思いから、宮伯（＝天官府に属す。宮伯中大夫と、宮伯下大夫とがあるが、おそらく後者か。）の乙弗鳳・張光洛・賀拔提・元進らを腹心として、宇文護排除の密謀がめぐらされる。これらの宮伯らは、李植と同省に勤務しているため、日頃宇文護と賀蘭祥が君臣の礼をわきまえず、今や帝政の態をなさなくなっている現状に、共通の憂いを抱いていたのだろう。この乙弗鳳だが、太祖の寵臣・乙弗朗の子だという（『北史』卷49 乙弗朗伝）以外は、分らない。父・乙弗朗が、太祖に非常に可愛がられたとあり、父以来の忠義を家の誇りに一身を投げうつ覚悟で、この計画に加わったのだろう。賀拔提・元進の二人は、これ以上の資料がなくよく分からない。

問題は、もう一人の宮伯・張光洛である。『周書』『孝閔帝本紀』を見ると、「又、宮伯・張光洛を引き同に謀る。」（『北史』同本紀もほぼ同じ。）とある。この「又：引き」というのが、注意を引く。この文脈からすると、この張光洛は当初から参加していたのではなく、後に声をかけられたものらしく思われる。この男が、後に密かに重要な役割を演じようとは、李植らには思いもよらなかったに違いない。

李植らは、ついに孝閔帝に説いていった。この辺の様子は、『周書』『北史』孝閔帝本紀・宇文護・李植伝等に記されるが、『周書』宇文護伝の記述が最も詳しい。今これを基に、その時の様子を総合して復元すると、

李植らはいった。

「宇文護は、趙貴を倒して以来、専横日に日に募り、それに謀臣どもがくつついております。大小となく、政治はみな彼が決しているありさま。臣下としての礼節も守らず、ますます横暴になっていくばかりにござりまする。願わくは、ご一刻も早くこの問題を解決遊

ばされますように。」

帝は、「然り。」とおっしゃられた。

また乙弗鳳等も言った。

「聖明な先王（＝太祖・宇文泰）の世には、李植・孫恆らに政務を委ねられ、今も孝閔帝の左右にお仕えしていますのに、どうしてこの朝政がうまく行かぬのでござりましょう。晋公殿は、いつも自分は陛下を補佐し、昔の周公のようにありたいと仰せです。臣の記憶では、周公は七年摂政されてから、ご成人遊ばされた王に天下を返されています。今日、陛下は七年後に、本当にこのようになるのでござりましょうか。陛下、願わくば（臣の言を？）お疑いになられませず、ぜひお信じ下さいますように。」孝閔帝は、ますますこれを信じたのである。そして、しばしば裏庭で密かに兵士を特訓し、宇文護を逮捕する態勢をとるのである。

しかし、またしても密告者が出た。かの張光洛だった。宇文護は、早速手を打ち、李植を梁州刺史に、孫恆を潼州刺史に転出させ、この計略をくい止めんとした。それでも帝が李植らを頼りにし、いつも彼らを召還しようとするため、宇文護はたまりかねて帝を諫めていった。この時の宇文護の熱弁は、さすがに迫力に富む。が、全文を掲げる余裕がないので要旨のみ記すと、

太祖の願託を受け、陛下のため、天下国家のためを思えばこそ、天威をも侵すような仕儀をしておるのに、わしの赤心を理解せず、疑いを持たれるとは真にもって心外この上ない。わしは天子の従兄、宰相というだけで十分満足しておる。もうこれ以上何も願ってはいない。陛下よ、もう小人の讒言などお信じ遊ばされるな。

と威嚇したのである。それでも、「帝は、猶おも之を猜」ったという（以上、『周書』宇文護伝）。

乙弗鳳らも、計画が一度明るみになってしまったためだろう。不安に駆られて（乙弗）鳳等、遂に自ら安からず、更に帝に奏して……『同』孝閔帝本紀）、ますます密かに陰謀を巡らすに至る（乙弗）鳳等、益々懼れ、密謀滋々甚し』『同』宇文護伝）。そして、ついに日を約して群公らが宴席に入る機会に、宇文護を捕え誅せんと企てたのだ。

こうした陰謀を、心から心配する者もあった。一人は、かつて宇文泰の肘（丞相の臂膊）『周書』卷29 耿豪伝）と異名を取り、兵部中大夫Ⅱ国防省局長を務めた後、今は少保の重職にある豪雄・蔡祐だった。蔡祐は、国防次官の尉遲綱とともに近衛兵を統括し、交替で宮殿に宿直していた。この頃、李植らが宇文護殺害を企てていたのを案じ、「（蔡）祐は、毎に泣いて諫めるも、（孝閔）帝は聴か」なかった（『周書』卷27 蔡祐伝）。孝閔帝には、宇文護の専横こそ国家を過つ癌との思いばかりが前面に出すぎ、国防省を牛耳るような強力な相手を敵に回しているということへの認識が薄かった。それが首尾よく成功するには、相当高度な戦略がなければならぬのに、周囲の強い懸念にも関わらず意外なほど綿密さを欠いていた。

またもう一人、李遠の弟に、李穆という小冢宰（Ⅱ丞相府・大家宰の下（次官））がいた。いわば、宇文護のお膝元で執務する最高幹部の一人である。李穆も、自らの公的立場から、今回の不穏な動静に心を悩ませていたようだ。かねて李植が家を守る男ではないと見て、「毎に（李）遠に之を除くを勸むも、遠は用いる能わず」だったという（『北史』卷59 李穆伝）。李植は、一途に突っ走る激しい気性の持ち主だったのだろう。そして、ついに事件は起きた。

ことの発端は、またしても張光洛の密告だった。話を聴いて、この時宇文護が召して相談したのが、彼の最側近たる国防相の賀蘭祥、及び同次官の尉遲綱等である点に注意を要する。賀蘭祥は、この際孝閔帝を廃そうと持ちかける。それに尉遲綱も加わって、不遜にも孝閔帝を廃することを決める（『同』兩列伝）。宇文護は、時に近衛兵を統率していた尉遲綱を宮殿に入らせ、乙弗鳳らを会議と偽って外に呼び出し、捕えて身柄を宇文護の館に送らせた。尉遲綱が衛兵を退出させたため、帝の回りには兵士は誰もいなくなった。そこで帝は、宮人らに武器を持たせ守ろうとした。しかし宇文護は、ついに国防相の賀蘭祥を派遣し、帝位を降りるよう迫るのである。この時の尉遲綱の近衛兵への指揮の敏捷さ、また退位を迫る賀蘭祥の太々しい剛胆さは目を見張る。北周の誇る国防省を牛耳ることは、それだけ大きな強権を発動できるということなのだ。

そして、帝を旧館に幽閉した上で、宇文護は、諸公卿らを召し重大決意を告げる。

「帝は、ご即位以来、荒淫で群小のものらと交わり、肉親を疎んじ、大臣・重臣らを皆誅さんという。この謀が実際に遂行されたなら、国家は必ずや顛覆してしまおう。もし、小生がそれで死ぬことにでもなれば、何の面目あって、先王に見ゆることができよう。たとえ今日、略陽め（Ⅱ孝閔帝、原文では呼び捨てにしている―筆者）に背くとも、国家には背くまいぞ。幸い、寧都公（Ⅱ明帝）はおん年も人徳も、兼ね備えておられ、仁孝ともにご立派であらせらる。四海の国々もよく帰順し、公も心より意を注いで下さるだろう。いざ、今こそ昏きを廃し、明を立てんとぞ思う。諸公ら、いかに？」

群臣は一同声を揃えて言った。

「これは、宇文家の一大事でござります。我らどうして命に従わないでいられましょうぞ。」
（『周書』巻11）

宇文護の弁は、かなりこじつけがましい理屈だ。諸公らも、強大な軍権を背景にしての発言だけに、まともに反論などできなかったろう。が、史書をよく見ると、その折宇文護の方針に反対する者もいたとある。民部中大夫の薛端である。『同』巻35の薛端伝に、ごく簡単な記述だが、こう記される。

晋公護、將に帝を廢せんとす。群官を召して之を議す。（民部中大夫の薛）端、頗る同異有り。護、悦ばず、出でて蔡州刺史と為らむ。

薛端も、かつて太祖に「一長史を得んと思わば、薛端に過ぎるものなし。」と賞賛されたほどの優秀な高官だった。太祖の周囲には、こうした優れた人材がかなりいたようだ。ひとたび有事の際は、高所大所から冷静な献策を欠かさないという態勢を持っていたのだろう。「躬ら忠信を行う」（蘇綽『六条詔書』其一「先治心」という、この種の少数だが精鋭な人材が、西北部の辺境に狭い足場しか持たなかった太祖・宇文泰政権の、実は最大の強みとなっていた。しかし、薛端の強い異議にも関わらず、宇文護は孝閔帝の廃位を決定してしまう。思惑通りに朝議は進み、謀反者の乙弗鳳・孫恆らは一挙に殺害。また李植だが、宇文護は父親である李遠のこれまでの勲功を考慮、処分を父親に委ねたが、李遠はどうしても手を下せず、必死に延命を図るのだった。結局は「宇文護、乃ち植を害」（『周書』李遠伝）することとなった。さらに宇文護は、孝閔帝廃位どころか、弑虐にまで踏み切ってしまう。その後には、二人目

の傀儡として、孝閔帝の長兄・宇文毓を推し、明帝となした。時に、永定元（五五七）年九月だった。

ところで今回の事件は、西魏から北周への王朝交代期の、趙貴・独孤信らとの権力闘争とは、全く意味合いを異にする。

（李）植、…（孝閔）帝に謂いて曰わく、「本より此の謀を為すは、社稷を安んじ、至尊を利するのみ。」（『周書』李遠伝）

処刑前の李植のこの赤裸々な供述が示すように、この計画は、到底天下を奪おうなどという野心から出たものではない。数人の忠義な政府高官らが、不正な権力の二重構造に異を唱え、北周の基本理念たる『周礼』により、帝王を奉ぜんとする一心からの起義だったと性格づけできよう。孝閔帝の弑虐という事態にまで発展してしまった今回の事変により、宇文護の隠された野望は、白日の下に照らし出されることとなった。また国家にとっては、再度の肅清のため、太祖以来の有能なスタッフを失い少なからぬ痛手となった。何よりも今度の事件は、多くの朝官をして、この新国家の未来に対する不安を掻き立てさせることになっただろう。宇文護は、すっかりガタついた政府組織を、早急に造り直そうとしてか、間髪を入れず、高官の人材集めに乗り出している。ところが、今度のことで威信地に落ちた宇文護を信じ、進んで付き従おうとする者はほとんどいなかった。その辺の資料は、史書の各列伝を注意深く探すと、幾つか見いだされる。

○晋公護の初めて摂政するや、（司会中大夫の柳慶を）引きて腹心と為さんと欲す。慶、之を辞す。頗る（宇文護の）旨に忤る。…慶、遂に疎んじ忌まれ、出でて万州刺史と為らる。世宗（＝明

帝) 尋いで悟り、留めて雍州別駕と為し、京兆尹を領せしむ。

〔周書〕卷22 柳慶伝)

○晋公護の初めて執政するや、(令狐) 整に(政治を) 委ねて腹心となさんと欲す。整、辞して敢えて(その任に) 当たらず。頗る其の意に迂り、護、此れを以て之を疎んず。

〔同〕卷36 令狐整伝)

○晋公護、既に孫恆・李植等を殺し、腹心を司会・柳慶、司会・令狐整等に委ねんと欲するも、慶・整並びに辞し(任に) 堪えずとなし、俱に(叱羅) 協を薦す。…(叱羅協は) 常に護の側に在り、時事を陳説し、多くは納用せらる。…其の言う所に及んでは、多くは事衷に乖り、当時、之を笑わざるはなし。

〔同〕卷11 叱羅協伝)

○大冢宰宇文護、(西魏の大儒者・蘇綽の子の蘇威を) 見るや之を礼し、其の女の新興主を以て焉に妻あわす。(しかるに、蘇威は) 護の専権を見るや、禍の己に及ぶを恐れ、逃げて山中に入る。叔父の逼まる所と為り、卒に免かれるを獲ず。然れども威は、毎に屏ぎ山寺に居り、諷誦(一)そら読みを以てて娛みと為す。

〔隋書〕卷41 蘇威伝)

孝閔帝弑虐直後、宇文護に側近として誘われた柳慶・令狐整らは辞退し、結局暗愚な叱羅協が登用されている。また蘇威の方は、孝閔帝・明帝いづれの弑虐後のものか不明だが、今関連する史料として掲げておく。これらよりすると、宇文護が、今度の政変を通していかに人々に疎まれ、

失望を買っていたかが窺えよう。挙げ句には、叱羅協のような「其の材識浅庸」(『周書』卷11 本伝) な者が側近となったことで、世の笑いを取る始末だった。宇文護は、この叱羅協を「大いに悦び、以為らく、(叱羅) 協を得ることの晩かりしと。即ち、軍司馬を授け、委ねるに兵馬を以て」(同) した。ここでも、宇文護が叱羅協に、やはり軍司馬(これには、上士・中士等の官もあるが、彼の地位からいって中大夫の方だろう) という国防省の重職を与えている点に、着目しなければならない。それにしても今回の政変は、宇文護に自ずから政権の舵取りの難しさを知らしめたようだ。明帝の即位にともない、宇文護が政権を部分的に帝に奉還するのも、そうした己の失政に対する世間の厳しい評価を踏まえてのことと考えられる。ただし、宇文護らしく、軍権のみは依然手放さなかった。ここに、三度目の凄惨な政変が起きる危険な芽があったが、これについては、別稿に譲ることにする。

四 不穏な時局下での「哀江南賦」 「擬連珠」等の擱筆

こうした重大な政変劇が打ち続く中、かつて梁の宮廷の中枢部にあって、この種の抗争を幾度も間近に経験した庾信が、無関心でいられたはずはあるまい。北朝でも、南朝の建康や江陵で起きたのと同種の異変が、勃発する恐れが出てきたのである。天道は依然として暗く、全く混沌としていた。一体この世はどこへ向かおうとしているのか。梁末の混乱を、庾信はしばしばこうした表現で捉えた。この時の彼の脳裏には、再びそのような思いが過ぎっていたはずだ。しかし旧解では、庾信がこれほどの激動に見舞われていたにもかかわらず、北周入仕直後の動向をほとんど視野に入れてはいない。前述のように小論は、「哀江南賦」は、ちょ

うどこの頃、つまり孝閔帝が弑虐された直後の五五七年十月の完成だろう、と推測する。その意味でも、この時期の空白を埋める作業は不可欠である。

今、「哀江南賦」の末尾の部分の、第47節^②（以下、哀47節等と略す）を見ると、

有嬌之後 有嬌（＝陳氏の古い姓）の後（＝後裔たる陳霸先）は
將育於姜 將に 姜（＝梁朝）に育まるるも
輸我神器 我に 神器（＝帝位）を輸し
居為讓王 （梁の敬帝を）居りて 讓王と為らしむ

とあり、梁朝に代わり、陳朝が樹立されたことを明言する。五五七年十月のことである。以後「哀江南賦」には、陳朝のその後の動向は全く記録されておらず、筆はここで止まっている。「哀7節」以来の江南哀史の叙事的な賦詩は、これをもって閉じられる。

哀48―50節は、もはや直接江南を賦するという内容にはなっておらず、梁朝の滅亡を事実として受け止めた上での、幾つかの内容からなる。本賦全体からすれば、いわばエピソードに当たるといえる。まず48節だが、地上の江南から天上に視点が移り、こうした事態をもたらした天への嘆きが述べられる。また49節では、江南から北朝に転じ、「老幼を提挈（＝携え）」、「累年」の流浪を忍び、「死生契闊（＝辛苦）」する悲しみが綴られる。この49節は、五五四年に西魏入りしてより（「哀江南賦」序の「華陽（＝江南のこと）より奔命して」に当たる）、西魏に帰順し（「同」序の「忽ち秦庭を踐む」に当たる）、王朝が代わり（「同」序の「東海の浜に譲り」に当たる）、五五七年北周の臣として辛苦する（「同」序の「遂に周粟を食む」に当たる）今日までを、私生活の面も含めて要約的に概

述したものといえる。

そして、本賦の最末尾に当たる第50節で、賦は締めくくられる。

日窮於紀
歲將復始

日は 紀（＝一年の暦）に於いて窮まり
歳は（一年めぐり）將に復た（新たに）始ま
らんとす

逼迫危慮

危慮において 逼迫し

端憂暮齒

暮齒に 端憂す

踐長樂之神阜

長樂（宮）の神阜（＝神殿）を踐み

望宣平之貴里

宣平（門）の貴里（＝高官の邸宅街）を望む

渭水貫於天門

渭水は 天門を貫き

驪山迴於地市

驪山は 地市を迴る

幕府大將軍之愛客

幕府 大將軍らの客を愛され

丞相平津侯之待士

丞相 平津侯の士を待さる

見鐘鼎於金張

鐘鼎を 金・張（氏）に見

聞絃歌於許史

絃歌を 許・史（氏）に聞く

豈知灞陵夜獵

豈に知らんや 灞陵の夜に獵するは

猶是故時將軍

猶お 是れ 故時の將軍なるを

咸陽布衣

咸陽の布衣は

非独思婦王子

独り 婦るを思う（梁朝の）王子のみに非ず

「日は、紀に於いて窮まり、歳は、將に復た始まらんとす」というのは、年末の意をいい、孝閔帝を弑虐した直後である十月と時期的に符合する。また、「危慮において逼迫し、暮齒に端憂す」の原因としては、（江南の滅亡を哀し）んで、という以外明言されてはいない。がこれまで見てきたことを踏まえれば、羈旅にあることに加えて、宇文護による孝閔帝暗

殺事件のあった直後ということも含めて、この国に留まることに對し、沈痛な心情になってのことと解される。

続けて、庾信ら旧梁朝の一部の臣も含めてだろう。北朝の官印を帶びて宮中に入りし、頭貴らと交わりを結び、天地の中心たるここ長安の都で、「大將軍・丞相」らの格別の恩顧を受けていることが述べられる。ここで問題なのが、「大將軍・丞相」が、具体的に誰を指すのかということだ。これについても、従来嚴密に論じられたことはないようだ。

まず、下句の「丞相、平津侯」の方から見てみよう。これは、五五七年一月の孝閔帝の即位に伴い、それまでの一柱国から「大司馬・晋国公」へ、ついで趙貴の殺害後に自ら丞相となった宇文護を指すのは間違いない。先の丞相・宇文泰亡き後、十五年の長期に渡り丞相として専権を振るつたのは、この宇文護を以てなく、この時期で外に「丞相」に該当する者は、彼以外にはないからだ。

では、なぜ庾信は、その宇文護を「平津侯」に喩るのか。倪璠注は、『西京雜記』『漢書』等を引き、公孫弘「平津侯」が、漢の武帝により布衣から宰相に拔擢され、よく士をもてなしたことを記す。確かに、この点、急に宰相の座をせしめ、接客外交に意を注いだ宇文護と共通しはする。しかし、それだと哀50節で、それまで「危慮」「端憂」といった記述をしていたのに、突然「平津侯の士を待す」という華麗な接客へ変わってしまうのでは、それまでの重苦しい文脈と全然繋がらない。作者の意識の自然な流れからいって、「平津侯の士を待す」には、厚遇の華やかさに潜む庾信の不安の痕跡があってもおかしくない。そこで、改めて『史記』『漢書』等の公孫弘の本伝に立ちかえって、倪璠の引用しない部分にもよく目を通してみると、次のような記述が見いだせる。

淮南・衡山謀反せしとき、党与を治べること方に急なるも、弘の病

甚だし。自ら以為えらく、功無くして侯に封ぜられ、宰相の位に居る。宜しく明主を佐け國家を填撫し、人をして臣子の道に由らしむべきに、今、諸侯に畔逆の計有り。此れ、大臣の奉職の称わざるゆえなり。云々と。

〔漢書〕卷58 本伝

これは、宰相として皇帝をよく補佐すべき立場なのに、諸侯らの反逆に会い苦慮する平津侯の姿である。これまで述べてきたように、宇文護は大司馬・宰相のポストをめぐって諸侯らと争い、さらに帝室と丞相府との間に権力闘争を引き起こした際にも朝臣らの反逆に会いと、まさに再三の抗争の当事者だった。宇文護と同じ冬官府に勤めたこともある庾信が、この宇文護に對し一定の人物品評をしていたらうことは間違いない。庾信が、暗にこうした「平津侯」の陰影の部分までも含めて、「平津侯」＝宇文護の比喩を選んだのだとすれば、「平津侯」の歓待の影に潜む暗雲も同時に付随していることで、庾信の警戒心が浮き彫りになってくる。この故に庾信はますます深く「危慮」「端憂」に陥りもし、江南への帰還を強く願ひもするのだと解される。

ならば「大將軍」の方は、誰を指すのか。これは古来、研究者が解釈に苦しんできた箇所だが、倪璠注では後の明帝・武帝を指すものの、當時はまだ大將軍だったから、こういったのだとする。倪璠が、どうやってこの結論を導き出したのかは、定かでない。この結論に至る倪璠の考察の過程を推測すると、次のようにならうか。身分的には、「大將軍」という肩書きの者は相当数おり、一般的には「丞相」の部下に配されるから、本来ならば「丞相」の下句にあるべきだろうが、奇異なことに「丞相」の上に配されている。「丞相」の上句にあることからすると、天子を指すのではないかと受けとれる。しかし、真に天子だとすれば、敢えて「大將軍」と称するのは誠に不敬だろう。かといって、実際にただの

「幕府の大將軍」らが「客を愛する」のだと解するのも、天子を差し置くこととなり不自然だ。とすると、これは「大將軍」は大將軍でも、実際は「天子」に当たる人物なのだろう。当時、宇文護より上位にあり得て、さらに「幕府の大將軍」として客人らに遇することができたのは、寧都公（後の明帝）・輔城公（後の武帝）の二公位しかいないので、おそらくこの二人を指すのだろう、と。

問題は、それをなぜ明確に天子と称さなかったのか、だ。思うに、北周の朝臣・庾信自身は天子の恩顧への辞を表したくとも、何か強く憚られる理由があつてそう言えなかったのではないか。別稿でも述べたが、^②例えば当の新天子に全く力がなく、丞相の方に実権があり、しかもこうした変則的体制自体が、自己の眼前で激しい政争を起こさせているという下での擱筆だと、そうした事態が起こり得よう。ちなみに、二年後に明帝が天子として親政しだす五五九年以後は、庾信は一貫して明帝・武帝らを、「天子」「天帝」「天造」「天造」等と称しているのが確認される。したがって陳寅恪説のように、「哀江南賦」を武帝の末年頃の作とするのは大きな矛盾である。また倪璠のように、「信、二帝を追序（二昔に遡って叙述する意）するなり」という発言で済ますのも中途半端である。いったい明帝・武帝らは「大將軍」という肩書きで、どれだけ長く庾信を遇したというのだろう。むしろ帝王に即位してからの実した厚遇の方が、庾信にとっては濃密で価値のあるものだったはずだ。そのことをこそ「追序」すべきではないのか。

小論では「哀江南賦」の擱筆は、北周出仕後の20余年も経た、武帝末年やさらに次の宣帝の時などではなく、北周発足間もなくの五五七年十月頃だと考える。こう解釈してこそ、なぜ明帝や武帝を天子とか帝王などと称せなかったのか。また、なぜ明帝や輔城公（後の武帝）らを、ただの「大將軍」と敢えて貶した言い方をしなければならなかったのか。さ

らには、なぜ、本来天子の一臣下にすぎないはずの「丞相・平津侯」への謝辞を、外交辞令的なものであるにせよ、丁重に持ち出さねばならなかったのか。それに加えて、「哀江南賦」に陳朝の樹立以後の動向が、なぜ全く記されなくなるのか等をも含めて、すべて解明されるように思う。

つまり、この「哀江南賦」は、孝閔帝の暗殺直後―明帝の即位前後の、新帝体制の行方が極めて混沌としている時期に、丞相・宇文護及び宇文護派（国防省一派の絶大な権力を畏怖しつつ、その目を恐れながら擱筆したものと考えられる。まだ明帝の政治的立場や旗色がまだ鮮明になっていない段階だったし、常識的な君臣関係が成り立つ状況にはなかったためだろう。そうした背景があつて、君臣の表面的地位関係が転倒したこの「大將軍（二実は天子）——丞相」という、誠に妙な言い方になったものと推測される。

ところで、孝閔帝の弑虐、そして明帝への首のすげ替えという流血の政変を、庾信はどう見ていたのか。これについて、庾信の心情を窺えるものは何かないだろうか。調べていくと、「擬連珠」其42が浮かび上がってくる。これは、従来倪璠の解では、「擬連珠」の連作を庾信の最晩年の作とする前提の下に、宇文護の政変や周隋間の政変を総合して述べたものとされてきたものだ。

此の章は、魏に入りて後、險阻を歷經し、宇文・楊氏の諸君の姓を易えて興こり、晋護や滕逋の属の権を争ひ相殺すを見るに喩う。

（擬連珠）其42倪解

が、「擬連珠」は、周知のように内容的・表現的に、「哀江南賦」と一連のものである。それなのに、もし其42が周隋間の政変を指すのだとする

と、連作「擬連珠」の構成が、内容的に其42だけ時間的に梁末から一挙に周末に飛躍してしまい、極めて不自然になってしまおう。また、周末まで延々と梁末の動乱の怨嗟を引きずっていたとすれば、到底北周朝きつての宮廷文臣・庾信はありえなかった筈だ。これらの矛盾を解決するには、これも北周初期の頃に攔筆したのではないか、と想定するよりない。

原文を掲げてみよう。

研ぎすました 口	磨礪唇吻
油を塗った 齒で	脂膏齒牙
世風に臨んで 毒を扇ぎたて	臨風扇毒
人影に向かい そつと毒を含んだ	向影吹沙
かくて	是以
われは 敬して これを遠ざけん	敬而遠之
山犬めの 子飼の五匹よ	豺有五子
ああ 恐ろしいことだ	吁可畏也
亡霊を載せた 一台の車よ	鬼有一車

暗示的な表現で、当時の毒々しい政変劇から身を避けようとする、庾信の不安な心情が読み取れる。山犬の子飼の五匹とは、おそらく宇文護一味のことだろう。これまでそのメンバーが指摘されたことはなかったと思うが、小論で見てきたように、いうまでもなく大司馬・賀蘭祥、小司馬・尉遲綱、軍司馬・叱羅協、後の柱国・侯龍恩（88頁の侯植の従兄）、密告者の宇文盛（後には、上柱国にまでなっている）や張光洛等が、その一味に該当する筈だ。亡霊を運ぶ一台の車とは、孝閔帝の靈柩車を指すごとくに思われる。

筆者が、この「擬連珠」其42を、周隋間の政変ではなく、孝閔帝期のものと考えるにはまだ他に根拠がある。従来指摘がないが、建徳元（572）年三月十八日、北周・武帝が宇文護を誅し、その翌日に詔を発した中の次の文にこういう。『周書』孝閔帝本紀に引く文はかなり簡略なため、「宇文護伝」より掲げる。

太師、大冢宰・晋公護は、地（＝家柄）としては、寔に宗親にして、義としては家国を兼ね。爰れ初めの草創より、共に艱難を濟い、遂に朝権を任総し、深き（心）を国命に寄せらる。（しかれども）其れ誠効を竭くし、罄くすに心力を以ってし、君に事うるの節を尽くし、送往の情（＝遠国の使者を惜しみ送別するような王者の情）を申す能わず。

朕の兄、故の略陽公（＝宇文護に弑虐された孝閔帝）は、英風秀遠にして、神機穎悟なり。地としては聖胤（＝正嫡の生まれ）に居り、礼として当壁（＝世継ぎ）に帰せらる。（兄上の）遺訓は（わが）耳に（今も）在り。「汝よ、宇文護に」害せらるるに忍え、（しかるべき時を待つて敵よりも）先に（宇文護に誅を）加えよ。（宇文護に対し、）永く摧割を尋け、骨髓を貫切せよ」と。（この後に明帝の事が記されるが、略す。）

朕、（兄上が西魏より）洪基（＝王朝）を纂承せし時、十有三載なり。政を委ねられ輔を師け、責めを宰司に成す。（宇文）護の志しは、君無きに在り、義は臣の節に違ふ。茲の螭の毒を抱き、彼の狼の心を逞しくし、情を誅暴に任せ、行いを威福に肆にし、朋党らは相い扇り、賄貨は公けに行われ、好む所は羽毛（＝世の声望）を加えること、惡む所は瘡痂（＝己の損害）を生ずることなり。

朕は、己が菲躬もて約す、情は庶政に存せんことをと。：

詔勅の原文はかなりの長文だが、宇文護の悪事を糾弾する部分は、右の部分に尽きる。問題は、この中の「茲の蠚の毒を抱き、彼の狼の心を逞しくし、情を誅暴に任せ、行いを威福に肆にし、朋党らは相い扇り……」という表現だ。この宇文護の悪事を糾弾した部分と、前の「擬連珠」其42の「風に臨んで毒を扇ぎ、影に向かい沙を吹き……豺に五子有り」とは、種々表現が類似していることに気づかされる。即ち、宇文護一味による帝の弑虐の陰謀を「毒」という言い方で捉え、そうした卑劣な行いをする輩を、人にあらざる「狼」「豺」と喩えている点で一致する。この武帝の詔勅の資料によれば、「毒を抱き」、「狼の心を逞しく」する者とは、明確に宇文護一派を指していることが分かる。

しかし其42は、あるいは宇文護による明帝毒殺の方をいうのでは、との疑いも出てくるかもしれない。が史書によれば、明帝毒殺時は孝閔帝の時のような複雑な陰謀ではなく、膳部下大夫・李安が宇文護の命を受けて単独で敢行したもののようだ。明帝暗殺に絡む記述はこれ以外には見当たらない。従って、史書に複雑な陰謀が記されるという限りでは、孝閔帝の弑虐劇の方を指すとみるのが妥当だろう。とはいっても、陰謀はあくまで秘密裏に謀られるものだから、明帝の時も李安の影で糸を引く暗黒機関があったとしてもおかしくはない。しかし、そこまで裏を穿って「擬連珠」其42の制作を、明帝の最期をいうとするのは、別稿で述べるように明帝と庾信の厚い君臣関係からいっても、今度は「擬連珠」全体の反北朝のモチーフと合わなくなってしまい、「擬連珠」の基盤からして不自然になってしまう。

さらに「擬連珠」其42を、周隋間の政治闘争―楊堅による趙王招や滕王迥らの惨殺―と解する有力な見方もある。がこれには大きな矛盾が二つある。一つは、北周・武帝の右の詔勅文の中の「擬連珠」其42と関連

する表現が、宇文護による孝閔帝の弑虐糾弾のものであり、周隋間のことではないこと。さらに史書を読む限りでは、周隋の政変の際に暗殺を積極的に仕掛けたのは、むしろ北周・趙王招の方であって楊堅ではないという点も看過できない。『周書』趙王招、『隋書』高祖本紀、同・元胄伝等を見ると、いずれも隋の高祖（＝当時は、北周の丞相）が、趙王招らの陰謀から辛うじて免れ、のちにこれら周の王族を誅したと明記される。

この記述を額面通りに受け取れば、庾信が、自己の最大の後援者としてあれほど賞賛してきた趙王招らを、毒々しい陰謀家として表現したという妙なことになってしまいかねず、それはありえない。かりに、その趙王招らの陰謀を逆手に取って滅した楊堅の方を、庾信がこう指弾したのだとすれば、これは史実にならない内容となってしまふ。おまけに、繰り返しになるが「擬連珠」の構成からいっても、西魏・北周への怨嗟がこの時期まで尾を引いていたとするのは、何といっても極めて不自然である。以上の諸点に加え、「擬連珠」と「哀江南賦」「擬詠懷詩」との深い内容的関連をも含めて総合すると、この周隋政変説という旧解はかなり無理があろう。

ところで「擬連珠」全体の制作年代について、魯同群氏は其27中に、「蓋し聞く、五十の年、壮情久しく歇く」とあるのを根拠に、50歳（五六二年、武帝の保定二年）前後のものとまず見当つけられた。さらに其12に、「（皇帝の棺は）穀林（＝堯帝の葬られた所）に長く送られ、（妃や家臣らは）蒼梧（＝舜帝の葬られた所）に従えず。（棺桶は）惟だ桐、惟だ葛のみ、（墓には）樹もなく、封（＝盛り土）もなし。」とあるのを、清・倪璠注をも踏まえて、これは陳の文帝の元嘉元（五六〇）年に、梁・元帝の亡骸が江寧に返還された時のことを指すとされた。そして、結論的に「擬連珠」の全体は、「五六〇年或いはその前」の作とされたので

ある。五六〇年とは、庾信が48歳の時で、明帝の武成二年にあたる。

庾信の詩文の繁年の大枠がある程度定まっていたような状況下で、その見直しの契機を作られた魯同群氏の勇氣ある発言は賞賛に値する。ただ、この説に対して筆者には、若干疑義がある。別稿で述べたように、²⁴筆者は其12首を、元帝ではなく簡文帝の葬儀を述べたものと解する。詳細は前稿に譲るが、もう一つ付加すると『陳書』世祖本紀によれば、この時梁・元帝は陳の文帝自身の手で、「車旗礼章、悉く梁典を用」いて丁重に埋葬されたのであって、「(棺桶は) 惟だ桐、惟だ葛のみ、(墓には) 樹もなく、封(＝盛り土) もなし。」というほど粗末・無惨なものではなかったということだ。やはりこの葬儀は、「哀江南賦」20節に、「乃ち(葬送用の) 車(のみの副葬で、簡文帝の粗末な棺) を郭門に側む(＝廟にて殯りすら行わずに、すぐ埋葬してしまふやり方)」といわれる、簡文帝の方に当たると見るのが妥当だろう。とすれば、制作年の基本条件から、五六〇年は外して考えた方がよいことになる。また其27首の「五十年」についても、自己の衰老を意識した一種の修辭的概数表現であり、このような事例は普通にあることからすると、厳密に五十歳と限定して読まなくともよいと考える。

愚考によれば、魯同群説のように「擬連珠」の擲筆を、明帝の武成二年まで下げるのはいささか困難だと思う。この年は、庾信が例の「麟趾学士」になった時であり、北周宮廷の大詩人という曲がりなりにも晴れやかな立場にある訳で、それと「擬連珠」の憂悶的内容が全く相入れないからだ。以上のことからすると「擬連珠」も、「哀江南賦」同様に、孝閔帝の死―明帝の即位前後のものではないかとの疑いが生じてくる。そこで、以下「擬連珠」の個々の内容を簡単に確認してみることにする。

「擬連珠」は、構成上は三部からなる。①建康の瓦解(其1―10)、②江陵の滅亡(其11―20)、③入北後の庾信の精神風景(其21―44)で

ある。①②は、まさに「哀江南賦」と同内容なので今は省き、③について次にその内容を概観してみよう。

例えば、其21の「平な丘の蟻すらも、水を失った龍を倒すことは容易だ」、「勢いの帰する所、…軽い鴻毛さえも水に沈む」、其39の「穀・洛の闘い(＝諸王子間の内紛)による衰退を、周王(＝梁の皇帝)は改めることができなかった」、其41の「木に虫食いが始まると、そのうちには根まで抜かれてしまふ」等は、梁朝滅亡に寄せる庾信の痛切な心情を詠じたものだろう。また其37の「その意気が犯しがたければ、…連城の壁も取り返せたものを」は、自己の和議が失敗したことへの無念の思いをいおう。

かくして庾信は、西魏に囚われの身となる。其22の「籠に閉じこめられた鶴は、一体いつ自由に羽ばたける日がくるのだろうか」は、そうした心情を表したものの。幽閉の日々の中、庾信の心は鬱々として怨嗟の情を帯ぶ。其23の「鬱抑して心は揚がらず、…怨嗟の水は憤りの泉となって噴き上がる」がそれにあたる。やがて庾信は、帰順を強いられ己の転節に苦悩する(其38「甘蕉はおのずと背丈は高いものだが、もとより節のないことが知られる」、其40「君子たるもの、道理がなければむやみに仕えて、経済的な施与を受けてはならぬもの」。こうした思いに悶々として過ごす彼は、心労の余りに不眠症に陥り(其30「徒らに不眠を勞す」、身も心も枯れ死状態となってしまふ(其27・31・34))。

そんな庾信の心に、断ち難い別離の情と望郷の念が沸き上がってくる。其24「刺客の旅に出る荊軻が燕市に別れるは、その悲しみに耐えぬものがある」、其26「晋陽、帰るを思ふ客、臨淄、羈旅の臣」、其28「信陵は趙にあつて帰郷を思ふこと多年に及んだ」、其44「既に羈旅にある身であれば、いかんともなしがたく…もはや帰るべき道のないことが知られる」。かつては多くの客人に囲まれていたのに、羈旅の身には残る者も

ほとんどない（其25「門下の賓客、任安独り存するのみ」と。

こんなことならいっそのこと、貧窮に耐えて隠棲するがまし（其29「孤竹の君は、実に西山の飢えに耐え抜いた士」ともいう。西魏・北周での任官もたいして重要なポストではなかった。其35「才は王の補佐として十分なのに、それをつまらぬ任務に就けるとは」と嘆く。吏隠の狭間で激しく苦悩する庾信は、この葛藤からの解放を老荘の道に求めようとする。其43「莊子や…老氏に帰するならば、どんなものも皆微小であり無だ。」と。

そして、問題の其42の「山犬の五人組が毒を噴いて、一台の靈柩車を引いていく」という表現に遭遇する。小論としては前述したように、本詩が連作中の一篇であることを重視し、北周朝に仕えてはどなくして庾信が目の当たりにした、恐ろしい政変悪夢劇を詠じたものだったと解したい。この他、其32「百尺の高さのものを九個の基石の上に積み重ねる」や、其33「金属にはそれぞれ固有の性質があるが、剣にすればたちまち凶暴な性格に変じてしまう」は、それぞれ累卵の危機、政治的環境と人間の心の危うい対応関係への危惧をいおう。が、これは梁朝末のものか、西魏・北周初のものかは定かではない。

以上が、「擬連珠」其21―44の概略だ。内容の同質性からいっても、この連作の全体は梁朝末から入北してまもなくの頃に、幽閉期間も含めて三四年間位に一貫する主題の下に制作されたと考えられる。其42は全体の中でも最も遅い時期の作に属すが、「擬連珠」全体の摺筆としては、この其42を書いた孝閔帝の暗殺の頃かと思われ、遅くとも北周の臣としての庾信が、一つの転機を迎えた明帝の初年（五五八年、庾信46歳）頃までと考えたい。

このような「擬連珠」の構成・内容・制作時期等の考察を踏まえて、改めて「擬連珠」其42を読解してみると、「擬連珠」全体との関連から

いっても、やはり北周初の孝閔帝の死を寓喩した作とした方が、自然なように思われる。こんな恐怖政治が行われる国ならば、「擬連珠」の各望郷表現以外に、「哀江南賦」50節にも表されるように、たとえ北周朝の頭貴（金・張氏、許・史氏や、宇文内史・李昶など）より、「鐘鼎・絃歌」などの厚いもてなしを受けたとて、庾信の心は前向きになれるはずもなかった。むしろ昔この秦の都・咸陽で、「布衣」の人質として過ごした、南国・楚の王子らのことを想起しつつ、いつか江南へ帰国せんことを願うのも当然だったろう。

五 「擬詠懷詩」の制作時期

それでは、「哀江南賦」「擬連珠」と同時期の作とされる、「擬詠懷詩」についてはどうか。これも、従来最晩年の作とされてきたものだが、最近の研究では大きな疑問が提示されてきている。中でも重要なのは、魯同群の五六四年（北周・武帝の保定4年）完成説だろう。その詳細はここでは略するが、「擬詠懷詩」というのは、詩句の指す具体的現実がいささか不鮮明な其17・26以外は、後述するように、全て梁末―西魏及び北周初期のことを述べているのは明らかだ。それなのに魯同群氏のように、其17・26の二首に限って、後年の武帝期のものと速断するには、いささか躊躇を覚える。別稿で論ずる予定だが、私は名君の誉れ高い明帝に仕えた庾信に、次第に変質していく姿を想定している。そうした新生・北周朝への共感を基盤に、ようやく北周に自然に出仕の心を抱くようになった庾信像と、この「擬詠懷詩」に繰り返される西魏・北周への熱き報復心に燃える庾信とは、全く異質だと思う。

今、判断が難しいこの其17・26は一応措くとして、「擬詠懷詩」がどんな構成・内容になっているのか、その概略を見てみよう。まず、梁の

滅亡について言及したものを中心に、大まかに年代順に並べ変えて掲げてみる。

西魏軍は江陵侵攻のための布陣を敷き、それに内訌した梁の蕭詧と協力した(其8)。元帝の外交の失敗が、この西魏軍の侵攻を招いたのだが、一体天はどうしてこのようなことをされるのか(其12)。梁にはついに滅びの予兆が起き、かくて江陵は陥落し、長安へと連行されていった(其11)。それに先立ち、自分は長安へ使者に立ったが、失敗。そのまま強制的に幽閉されてしまった(其3)。この和議の挫折が誠に惜しまれてならない(其2)。その結果、梁朝の滅亡の日を迎える羽目になってしまったのだ(其27)。もし梁軍が西魏に先制攻撃をしかけていたら事態はもう少し違っていたかもしれないのに(其15)。この衰亡を前に、今は亡き簡文帝のことが偲ばれる(其23)。

以上、配列順はかなりバラバラだが、これらの作品はすべて梁末の政変を中心に描いたものといえる。「擬詠懷詩」は、感懷の赴くままに詠じたものらしく、配列や構成自体にはさほどの意味がないようだ。右の並べ方も、梁末の記述の違いによって別の配列でもおかしくはない。これで一応、「哀江南賦」「擬連珠」と同じ梁末の政変描写になっていることを確認できれば十分だ。

次に、西魏下で三年間別館に強制的に囚われの身となっていた時の悲嘆を詠じたのが、其3の「嫁ぐ心のない妓女は、むりに嫁入りの苦しみに会い、異国の子弟は人質に取られ滞留させらる」、其14の「今の己は、まるで麒麟が季氏の罠にかかってもがき、また虎が周王の罠いで暴れるようなもの」という表現だ。こうした極めて屈辱的な状況下では、おのずから復讐の炎が燃え上がる。庾信は、現在の自己を晋の豫讓に喩え、「よもや豫讓のように復讐のために、炭を吞んで声を変える身になろうとは……」と絶句する(其6)。また、張良が秦への報復のために、家財

をはたいて東の地に力士を求めたのならおうと思っても、自分にはそれだけの万金がないと惜しむ(其13)。これらの作品が、西魏・宇文泰との劇的な出会い方をする以前のものらしいことは、既に述べたので省略する。

しかし、庾信にはさらに厳しい試練の時が待っていた。梁の復興の願いも空しく、ついに西魏への帰順が余儀なくされるのである。この時の屈辱の苦悩を詠じた作品群は、「擬連珠」其21―44首同様に、優れた内面描写になっていて、「擬詠懷詩」中で最も個人的かつ価値ある部分となっている。庾信は変節の苦しみを「悲吟」し(其1)、このまま「関外の人」となって終わってしまうことの予感に襲われる(其5)。これに耐えて生きるとは、死の苦しみ以上だと嘆き(其9・20)、夜中に忽然と愁いが湧き出して止まらなくなったりする(其18)。そして、今や己は生気の尽きた「揺落」せる枯木であり(其21)、松材で造った琴を抱いて悲しみをかきならすよりなく(其22)、ただ霧の中、海の上をあてもなくさすらうようなものだという(其24)。こんな屈辱に耐えるくらいなら、いつそ隠棲して清貧に甘んじよう(其16・25)ともいう。

このように、誠実にまた赤裸々に国家と士大夫との濃密な関係を省察し、吏と隠の狭間で倫理的な良臣のあり方を探求し、その心情を遠い異境の思いを添えて詩歌に表すという方法は、後の杜甫にも少なからぬ影響を与え、ひいてはその杜甫を介して、中唐や宋代以降の良臣観にも一定の影を落としているように思われる。それがやがては、表面的な庾信理解から全く逆転してしまい、清の全祖望のような過激な愛国主義者によって、庾信は破廉恥な変節者という汚名を着せられるケースも出てくる。あるべき良臣像を求めて深く苦悩した者が、長い年月の経過とともに詳しい事跡が忘れ去られ、ついには明確な根拠も持たずに恣意的に解釈され、ダメな武臣の代表にされてしまったわけだ。歴史的な誤読が庾

信において典型的に起きたわけだが、その詳細はまた今後の課題として
措いておこう。ともかくも、国家にとっての倫理的良臣とは何か。加えて
亡国の悲哀と異国での寂寥たる心情等が、庾信によって深刻な言葉に
結実されたことは、中国文学の内面の開拓史上、さらには後世への庾信
の影響のうち最も顕著な愛国文学の系譜にとって、重要な一事件だった
といえよう。

この他、「擬詠懷詩」には、南北に分断された別離の悲しみを詠じた
作もある。

其7は「断」の字を三度も用いた所に、当時の庾信の悲しみの強さが表
れていると評される有名な詩だ。また其10は、李陵と蘇武の別離の故事
を踏まえての表現だ。庾信の望郷の情が高まったと考えられる時期とし
ては、一般には南北交渉の行われた武帝の保定二（五六二）年、同建德
四（五七五）年が知られる。ただ余り言われないが、庾信が西魏に移つ
て間もなくの頃もまた、そうした望郷の思いが愛国の情と相まって極め
て強かった時期だったことは、これも既述した所である。私は、「擬詠
懷詩」の大半を、基本的に梁末より北周初の激動下の作と見ているが、
この其7・10も入北直後の望郷の念を詠じたという方向で見ることがで
きる。

以上が、其17・26を除く「擬詠懷詩」の全部の概略である。一応、ど
れも北朝下での寄留に強い抵抗と違和感が詠出されていて、基本的に北
周初までの感慨だと見なしうる。さて、問題は其26と17である。

其26

1 ああ もの寂し
遠くに見ゆる 宿場や砦
ああ もの悲し

1 蕭條亭障遠
淒愴風塵多
3 関門臨白狄

この世の 風塵の多さよ

3 関門がそびえる辺りには

北方の白狄族の部落

城壁が影を落とすは

異境の黄河の上

城影入黄河

5 秋風別蘇武

寒水送荆軻

7 誰言氣蓋世

晨起帳中歌

5 秋風の吹く時節

蘇武に別れる 身はつらし

寒々とした河の流るる時

生きて再び帰らぬ 荆軻を送るような

そんな悲しい別れが

今の世に またとあらうとは

7 誰か歌わん

「わが気は この世を覆う」など

そんな英雄 今 どこにおろうぞ

ただあした 「垓下の歌」をば放吟し

敗将・項羽の悲しみ ともにするのみ

右の詩で、魯同群氏が本詩を武帝期の作とする根拠は、34句「関門
は白狄に臨み、城影は黄河に入る」を、庾信が保定3-4（五六三-五
六四）年、弘農郡守になったときの、その実景に相違ないと考えられた
ことによる。しかし、魯同群氏の論には、なぜそれが他の城ではなく、
弘農城でなければならぬのかは全く示されていない。庾信が弘農郡守
になっているからという、その繫年自体明確なものではないだけに、こ

の説は十全ではあるまい。また56句の望郷表現は、私は「擬詠懷詩」全体のモチーフからいっても、前述したような入北直後の感慨とみたい。さらに78句の「誰か言う、気は世を蓋うと、晨に起き帳中に歌うのみ」は、例の項羽の故事で、敗將の悲哀の情をいう。倪璠の注にも、「江陵の亡びを傷むこと、垓下に同じき也」とあるように、梁朝の代表的人物として、対西魏の和平の任務に当たったものの挫折。結局、江陵滅亡を招いてしまった自責をふくむ表現かと思われる。とすると、其26も入北直後の生々しい感慨が基調になっていると思われる。

もし小論のように、「擬詠懷詩」全体の主題の一つたる北朝への怨嗟の情を、明帝以後の庾信に積極的に読解しない立場からすると、本詩を強いて武帝期の弘農郡守の時のものと読む必要はない。かといって、明帝期も初めのうちは、まだ不信の情を残してはいたから（別稿を予定）、孝閔帝期までのものと限定するのも実際は難しい。明快に特定できぬ所以だが、「哀江南賦」「擬連珠」との密接な関連からして、たとえ明帝期にずれこんだとしても、そう遅くない時期と見ていた方が穩当かと思う。その時期までに庾信が見た、どこか黄河沿いのとある城街の景観として、不都合はないように思われる。

では、其17はどうだろう。

1 ああ 荒城に 日は落ちて	1 日晚荒城上
黄昏深く 夕映えし頃	蒼茫余落暉
遠地より帰還する 雄将らの姿	都護樓蘭返
ある都護は 樓蘭から	將軍疎勒帰
ある將軍は 疎勒から	5 馬有風塵色
	人多閑塞衣
	陣雲平不動
5 見よ	

歴戦の軍馬は 風塵の色に染まり
連戦の兵士は この地の城塞の服多し
陣雲平に 動かぬけれど
枯れ蓬 ヒュウヒュウ 秋風に
巻かれて どこかに 飛ばされそう
9 聞道樓船戦 今年不解困

9 風の噂に 聞こえくる
將軍 樓船率い 戦うも
戦は止まず 今年また
陣困いは解けぬだろう と
わびしい世相よ いつまでぞ

本詩を、魯同群氏は武帝の保定4（五六四）年の作と見る。その根拠は、910句「聞道らく、樓船の戦い、今年も困みを解かずと」が、保定4年北周軍による北斉攻撃を指すと理解されたことによる。確かに、史書の記述ではこの年に北斉との交戦が再開されている。しかし、何故他の年ではなく、この年の戦いを指さねばならないのか。『周書』を見て、北周初でも国内各地への出兵は依然続行中である。残念ながらこの魯説は、明確な論証なしでの推定といわざるを得ない。基本的には本詩も、「擬詠懷詩」と題した連作の一首である以上、他の作群と同一テーマを根底では共有する筈だ。とすれば魯説では、この一作のために、武帝期まで昔の怨みや報復の思いを引きずってしまうことになりはしないか。

魯氏ばかりではない。旧説のほとんど全てが、「擬詠懷詩」を武帝期の末頃の作と明言している訳だが、それにしても、激しい怨嗟の情や復讐の念をあらさまにいう（―當時は内面に深く秘めていた）ような庾

信を、名君・武帝とはいえどんな論理で重用できたのだろう。また魯説のように、其17を武帝期の初期の作だと解するなら、心情的には忠臣として重用されていた時期に、連作の質的一貫性などものかわ、反北朝の作群と大らかに混在させ、「擬詠懷詩」の詩題で一括してしまったことになるが、それはどういう創作心理によると考えられるのか。過去の引き裂かれた無惨な記憶を呼び覚まし、強いて「擬詠懷詩」と銘打たずとも、この一作だけを別の詩題にした方が、その時の自己の心情をより率直に語れたはずではあるまいか。何も敢えて武帝の侮蔑と猜疑心を買うような昔の主題を、後生大事に墨守しなければならない必然性はあるまい。この矛盾は、「哀江南賦」50節、「擬連珠」其42においても、同様にいえる。

これらの点から推して、小論としては、「擬詠懷詩」もやはり「哀江南賦」「擬連珠」とほぼ同時の孝閔帝の死の頃、ないしは遅くとも「思旧の銘」の執筆された明帝の初期には攔筆していたと見たい。ただ「哀江南賦」「擬連珠」には登場してきた宇文護が、「擬詠懷詩」では明確な形では現れないというのが目を引く。この一点でもって云々はできないが、あるいはこれら三部作の中で、最初に攔筆した可能性もあるのかも知れない。今は、この三部作の制作時期を、これくらいの幅で見ておくこととしたい。とすると、名君・宇文泰との邂逅により、北朝への深い傷を癒し始めたかに見えた庾信だったが、一転して宇文護の専横と彼によって繰り返される無惨な殺戮に遭遇し、再び北朝への嫌悪感や違和感に見舞われ、そこから再燃してきた別離の情や望郷の念等に苦しんだ様子が推測されてこよう。「哀江南賦」「擬連珠」及び「擬詠懷詩」の三部作は、この憂愁の再ピーク時たる、孝閔帝の弑虐から明帝の即位前後頃に攔筆したのではないか、とこのように推測するものである。

おわりに

以上、小論では、孝閔帝期の政治史を宇文護を中心に再現することを通して、その激動の中を庾信がどのような心情で過ごし、またその思いを作品にどう表しているかを考察してみた。振り返ってみるに、宇文護の専横の史料の復元に、かなり紙数と時間を割きすぎてしまったが、この暗い背景なくして、庾信の「哀江南賦」50節も、「擬連珠」其42もその意味を深く読解することができない。西魏の名君・宇文泰との親交が庾信の心を開いたかと思った途端、宇文護の実権下で一転して、「敬して之（＝北周の政治権力、ないしはその闘争）を遠ざけん」（「擬連珠」其42）と、再び慌ただしく北周と距離を置くようになるのも、また次の明帝期でも、はじめのうち庾信になお北周朝より距離を置き、江南への帰還を願うという硬い態度が感じられるのも、結局はこの暗い政治の汚濁への悲観があるからだと考える。

庾信の三部作の執筆は、北周初の激しい権力闘争と時期的にぶつかった格好だが、庾信の文集にはこの異国の暗い政治的現実に対して、梁末への詳細な記述に見せた時のような、自身を司馬遷に擬するほどの溢れ出てくるような歴史執筆の欲求というのは見られない。所詮は縁のない「羈旅の臣」という立場からすれば、それも当然のことだったろう。この政変について『周書』『隋書』を丹念に読み拾い、各書に散らばる断片的な記述を時間をかけて慎重に繋いでいくと、当時の朝廷全体を巻き込んだ修羅の殺戮の全貌が初めて見えてきた。この恐怖政治の中で、庾信は再びこの異国にも失望感や未来への憂慮を抱くことになったと推測される。この点を十分に押さえておかないと、西魏・北周における「羈旅の臣」庾信の複雑な心情の揺れの全体を、明らかにするのは甚だ困難なものとなる。

長い政治的混乱に翻弄された庾信の研究は、資料的根拠となし得るものが極めて限られていて、相当な難物だからごく小さな手がかりも見逃すことはできない。とはいっても、史学的に未解明の西魏より北周への王朝交替期の、歴史的國家像の詳細な全体的把握など文学畑の者にできよう筈はない。庾信論との関わりに限っての史的復元なので、史学者の眼より見れば不十分な箇所が多々あろう。ご教示賜れば幸いである。また庾信の詩文の細かな繫年などは、煩雑この上もない無味乾燥な作業だが、実際信頼できる繫年なしには、子細な意境表現の作品考察や、またその文学史的意義の研究についても前へ進みようがない。旧説では解けない問題を何とか解明し、長年誤解の霧中に閉ざされてきた一人物の真実を客観的に捉えるためにも、当面はこの基礎作業を続けざるを得ない。

北周朝内での庾信の事跡・内面の分析も、当時の官僚制度や交友関係にできる限り留意しつつ探ってみたが、庾信の最初の官としての「司水下大夫」の事跡も、宇文内史Ⅱ李昶との交わりもこれ以上の作品・資料がなく、当時の庾信の詳細が分かったというにはほど遠い。その結果、論全体としては、紙数の大半を背景の考察の方に費してしまった。また「羈旅の臣」庾信の厳しい苦境の中から、斬新な詩句が生まれてきた様子に言及したもの、これが真に二百年も飛び越えて直接杜甫にいつてしまうのかどうか。その間にどのような庾信文学の継承があったのか。さらには、筆者が「三部作」等の制作年代の一根拠としてしばしば持ち出す、明帝・武帝と庾信との密接な君臣関係の詳細な分析など、説明を要する課題は多い。今後の考察の機会を待ちたい。

明帝期の庾信については、次稿で取り上げる予定である。

注

- ⑮ 谷川道雄「西魏〈六条詔書〉における士大夫倫理」(『中国中世社会と共同体』国書刊行会 76)に詳述されるのを参照。
- ⑯ 『周礼』の基本思想が、儒家の立場からする國家機構の体系的詳述にあることは周知の事実だろう。天子の公権が天よりの神授とする見方もこの一環をなす。『周礼』の研究は種々あるが、例えば堀池信夫『周礼』の一考察(『漢魏思想史研究』所収 明治書院 88)等を参照。
- ⑰ 拙稿「庾信〈哀江南賦〉論―その主題・構成及び制作年代―」(『集刊東洋学』66 91)に示した「哀江南賦」の構成表の節数による。
- ⑱ 注⑯の論文を参照されたい。
- ⑲ 魯同群「庾信入北仕歴及其主要作品的年代」(『文史』19輯 83-8 中華書局)
- ⑳ 拙稿「庾信における世界の解体と新生の表現―『左伝』『史記』等より見たその世界観―」(『《史記》《漢書》の再検討と古代社会の地域的研究』愛媛大学教育学部 科研報告書 94)第二章を参照。
- ㉑ 注㉒に同じ。
- ㉒ 注㉑論文の第三・四章を参照。

(了)

(一九九四年十月十一日受理)